

港区立郷土歴史館

歴史館だより

港区ゆかりの額絵馬・小絵馬

正月谷 眞子
(学芸員)

午年にあやかって、今回は港区ゆかりの絵馬をご紹介します。絵馬とは、祈願のために社寺に奉納される木板のことです。絵馬の起源は、古代に生きた馬を神に献上したことにまで遡ります。古代の人びとは、干ばつや長雨などの異常気象が起きた時に、黒雲を象徴する黒毛の馬や吉祥を象徴する白毛・赤毛の馬を神に献上して、降雨や晴天を祈りました。馬が用意できない場合には、生きた馬の代わりとなる土製・木製の馬形が献上され、奈良・平安時代には板に馬の絵を描いた絵馬が用いられるようになります。

絵馬は、額絵馬（大絵馬）と小絵馬の二つに分けられます。額絵馬は、扁額形式の大型の絵馬のことで、拝殿や絵馬堂に飾られました。室町時代末期から絵馬の大型化が進み、神仏や武者、祭礼、物語など、さまざまな図柄の絵馬が作られていきます。安土桃山時代に入ると、著名な絵師に依頼して豪華な額絵馬を制作してもらう風潮が強まり、美術的価値のある額絵馬が奉納されるようになりました。

港区の赤坂氷川神社には、磯田長秋筆「祭礼山車行列額絵」や月岡芳年筆「『ま』組火消絵馬」（いずれも港区指定文化財、見学不可）など、赤坂氷川神社の祭礼の日に巡行する山車や、町火消の「ま」組が火事場に向かう光景を描いた額絵馬が保管されています。これらの額絵馬は、明治時代に奉納されたもので、江戸時代の赤坂の様子をうかがうことができます。

三田にある魚籃寺には、江戸時代末期以降に奉納された「魚籃寺奉納絵馬及び掛け軸」（港区指定文化財、見学不可）が保管されています。7点ある額絵馬のうち、4点は大漁祈願・魚介類供養・海上安全・商売繁盛・病氣平癒などにご利益のある魚籃観音を拝む人びとの姿が描かれています。3点の額絵馬と掛け軸には、魚籃観音の図像と靈験譚が描かれ、江戸時代の民間信仰の形態を知ることができます。

小絵馬は、社寺で吊り下げられる小型の絵馬のこ

とです。江戸時代になると小絵馬に絵を描いて販売する絵馬屋や絵馬師が登場し、二月の初午の前には町に多くの絵馬屋が現れました。個人の悩みや祈りのために小絵馬を奉納する風習は庶民の間で広くおこなわれ、現在も連綿と続けられています。

東新橋にある日比谷神社では、戦前まで鯖の絵が描かれた鯖絵馬が販売されていました（図1）。日比谷神社は別名「鯖稲荷」（旅泊稲荷）とも呼ばれ、歯痛に苦しむ人が鯖を絶ち、治ったお礼に鯖を奉納したことから、虫歯や子どもの虫封じのために鯖絵馬が奉納される



図1 鯖絵馬（当館蔵）

ようになりました。また、虎ノ門にある金刀比羅宮では、盃を伏せた酒樽の絵が描かれた絵馬と酒と一緒に奉納することで、禁酒の達成を祈願しました。願いを成就させるために鯖や酒といった特定の物を絶つという、物絶ちの信仰をみることができます。

小絵馬の中には、社寺とゆかりの深い縁起物や郷土玩具が描かれたものもあります。例えば、芝大神宮では、秋祭り（だらだら祭り）で売られる名物の生姜と千木筥と呼ばれる三段重ねの小箱が描かれた小絵馬が販売されています。千木筥は、「千木」が「千着」に通じることから箆筥にしまうと衣類が増えるといわれ、招福の縁起物として親しまれています。他にも、十二支や七福神など、季節や年中行事にあわせた図柄も多くみられ、近年ではデザイン性に富んだ小絵馬にも人気が集まっています。

絵馬の形や図柄、絵馬に書かれる願い事には、その時代の世相が色濃く反映されます。祈願の内容は時代とともに変化していきませんが、小絵馬に祈りを託す風習はこれからも続いていくことでしょう。

参考文献

岩井宏実 1974『ものと人間の文化史 12・絵馬』法政大学出版局
港区総務部総務課編 2021『港区史 近世(下)』第3巻 通史編 港区
港区立郷土歴史館編 2024『港区文化財のしおり』港区教育委員会



港区立郷土歴史館

歴史館だより

がぜんぼうだに
我善坊谷遺跡旗本竹中家墓所の副葬品岡本 康則
(学芸員)

麻 布台一丁目にある我善坊谷遺跡は、平成29(2017)年から令和元(2019)年にかけて調査した江戸時代の武家屋敷・町屋・寺院の遺跡です。発掘調査では8,277㎡を調査し、大名屋敷の中にあつた稻荷社の痕跡、寺院から門前町屋へ延びる大下水、絢爛豪華な副葬品が出土した墓などが確認されました。今回は、令和8年1月10日～3月8日に開催した、発掘調査速報展で展示した、旗本竹中家第六代当主竹中定矩の妻の墓から出土した副葬品を紹介します。

竹中定矩の妻は方形木棺に納められていました。それとともに、多くの副葬品も納められており、その数382点にのぼります。蒔絵が施された漆製品や鍍金が施された金属製品は、美術的価値も見出せそうなくらい良好な状態で出土しています。

副葬品のなかには、既婚女性が使用のお歯黒道具が納められていました(写真赤枠)。漆製品のお歯黒箱(赤枠①右)、耳盥(赤枠①左)、鍍金を施した銅製の鉄漿沸し(赤枠②上段左)、鉄漿坏(赤枠②上段右3つ)、磁器製のうがい茶碗(赤枠③)があります。

お歯黒箱は、お歯黒道具をしまうための箱。うがい茶碗と耳盥は、お歯黒の最後にうがいをする時に使用するもの。鉄漿沸しは、お歯黒水※1を沸かすためのもの。鉄漿坏は沸かしたお歯黒水を入れるもの。渡し金は耳盥の上に載せ、鉄漿沸しや鉄漿坏の置き場所を作るものです。

また、五倍子粉※2入れの可能性のある小型の漆製品の箱もあります。

副葬品には、漆製品の硯箱もありました(写真青枠)。蓋の内外面に蒔絵が施されており、外面には梨地に秋草と曳牛人物像が、内面には梨地に双鶴と水流、籠目格子と沢瀉が描かれています。硯箱の中には、硯、水滴、墨、和鋏が入れられていました。

お歯黒道具や筆記具のほかにも様々な副葬品が納められており、銀葉箱や香炉といった香道具、柄鏡や懐中鏡、白木や漆塗の櫛、簪など生前使用していたと思われるものや、一分判金や豆板銀といった死後に使うための貨幣が入れられています。

これらの副葬品は、被葬者の身分の高さや死後の世界でも困ることがないように丁寧に埋葬されたことがうかがえる資料です。



副葬品

※1 お歯黒水とは、酢、米のとぎ汁に錆びた鉄を入れて作られた、歯に塗る水である。

※2 五倍子粉とは、ヌルデという木のこぶを粉にしたもので、お歯黒水と交互に歯に塗ることによって、歯が黒くなる。

参考文献

大成エンジニアリング株式会社『我善坊谷遺跡発掘調査報告書』港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書99 森ビル株式会社、2023